

フラット化する社会の陥穽

～カリスマ待望論をめぐって～

土井隆義

長引く不況のなか、閉塞感が漂う現在の日本では、しばしばカリスマ的な指導者を待望する声が聞こえてくる。たしかに今のところは、その候補に挙げられる人物が、圧倒的多数の国民から熱狂的な支持を集めるまでに至ってはいない。しかし今後、その傾向が急激に強まることも限らない。そこで本論は、現在のカリスマ待望論の出所と、その行方を探ることを目的としたい。

1. 社会の流動性の高まり

(1) 満足感と不安感の併存

わが国の18歳から24歳の若者を対象として、1970年代初頭に第1回調査が行なわれて以来、5年間隔で継続調査が行なわれている「世界青年意識調査」の結果によれば、1970年代以降、友人関係に対する日本の若者の満足度は右肩上がりで高まっている。「友人や仲間といるときに充実感を覚える」と回答した若者は、1970年代には約50%だったが、2000年代には約75%に増えている⁽¹⁾。

「世界青年意識調査」では、「友人や仲間のことが悩みや心配」と考える若者の割合も調べているが、友人関係に充実感を覚える人の割合が上昇するにつれ、そこに悩みを見出す人の割合は下がっていた。満足度が上昇してきたのだから、そこに問題を感じる人が減ったのは当然といえるだろう。ところが、じつは1990年代に入ると、その傾向が反転しはじめることになるのである。

同じような現象は、家族関係にも見受けられる。「家族といるときに充実感を覚える」と回答した若者は、1970代には約20%だったが、2000年代には約40%に増えている。しかし、それと同時に、「家族のことが悩みや心配」と考える若者の割合も、1990年代まではいったん減少していたのに、その後は再び増加へ転じているのである。これは、いったい何故なのだろうか。

この調査では「悩みや心配」としか尋ねていないので、その中身までは分からない。しかし、友人関係や家族関係に不満を覚える人の割合が増えたのでないことは確かだろう。なぜなら、満足度はずっと上昇し続けているからである。では、反転して増えはじめた「悩みや心配」とは具体的に何だろうか。それは、おそらく不安ではないだろうか。そう解釈すると、表面上は満足度の上昇と相反する現

象のように見えて、じつは互いに矛盾するものではないことが見えてくる。

(2) 規制緩和される人間関係

社会を近代化させていく過程で、私たちは旧来の制度や規範へのこだわりを弱め、それらに縛られない多様な価値観を持つようになった。その結果、地縁や血縁などの伝統的な共同体も、学校や職場のような社会的な団体も、かつて有していた強い拘束力を徐々に弱めていった。また、友人関係のような自発的に作り上げられる集団も、その自由度を段々と高めていった。

一方、過去を振り返ってみれば、同じ地域の住民だから、同じ親族の一員だから、同じ会社の社員だからといったように、社会的な枠組みに同じく属することが、かつては友人や仲間との関係を支える強力な基盤となっていた。換言すれば、私たちの人間関係は、その多くが社会的な制度に強く縛られていた。たとえば、生徒や学生の場合にも、同じ学校や同じクラスの生徒になった以上は仲間でならなければならないとか、あるいは社会人なら、同じ会社や同じ職場にいる以上は助け合わねばならないとか、そういった規範的な圧力が少なからず存在していた。

もちろん、現在でも、人間関係を構築する最初のきっかけは、当時と大して違ってはいないだろう。しかし、その後の関係を維持していく上で、制度的な基盤が果たす役割は大幅に小さくなっている。同じクラスの生徒だからといって、自分と気の合わない相手と無理して付きあう必要などないし、同じ職場の一員だからといって、無理に運命を共有する必要もない。制度的な枠組みの拘束力が弱まるなかで、そう考える人びとが確実に増えている。

このように人間関係の自由度が増した結果、不本意な相手との関係に縛られることが減ってきたのだから、その満足度が上昇してくるのも当然のことだろう。しかし、それは同時に、じつは人々の不安を駆り立てるものでもある。なぜなら、かつてのように制度的な枠組みが関係を拘束しなくなったということは、裏を返せば、制度的な枠組みが関係を保証してくれる基盤ではなくなり、それだけ自己責任の比重が高まったことをも意味するからである。

(3) 人間関係のリスク化と格差化

自分が好まない相手との関係に無理に縛られることがないという事情は、当然ながら相手の側にもまた同様に当てはまる。関係が自由化すると、たとえ同じクラスの生徒でも、相手が自分と付きあってくれる保証はどこにもなくなるし、たとえ同じ職場の仲間でも、相手がいつも自分を守ってくれるとは限らなくなる。付きあう相手を自分が勝手に選択できる自由は、その相手から自分が選択してもらえないかもしれないリスクとつねにセットなのである。

たとえば、雇用をめぐる規制緩和は、より良い職場環境を求めて労働者が自由に転職できる環境を用意した。しかし同時に、雇用主の都合でいつリストラの対象にされてもおかしくない状況をも生み出した。人間関係についても、それとま

まったく同じことがいえる。制度的な枠組みが強制力を失ってくると、付き合いが自由になる一方で、かつてのような安定性をそこに期待することも難しくなってくるのである。

また、かつて制度的な枠組みによって人間関係がきつく縛られていた時代には、個人によってその幅にあまり差異がなかったともいえる。しかし、既存の枠組みの拘束力が緩んで人間関係が縛られなくなったということは、その枠組みが安定した関係を保証してくれなくなったということも意味している。その結果、いわゆる対人関係を器用にこなせる人物と、そういった社交術に疎くて不得手な人物との間に、大きな格差が生まれてくることになるのである。

たとえば、雇用をめぐる規制緩和は、より条件の良い職場に転職して大金を稼げる人間を生む一方で、安定した職に就けず日々の生活に苦しむ人間をも生み出した。いわゆる貧富の格差の拡大である。それと同じく人間関係の自由化も、場を盛り上げる能力に長け、対人関係を器用にこなせる人間と、そういった社交術に疎く、対人関係が不得手な人間との間に、かつて以上の大きな格差をもたらすことになる。そして、人びとの間に生じたその格差は、人間としての価値を測る物差しとして作動しはじめる。すなわち、人間関係の幅広さで人間の序列が決まるかのような感覚が広がっていくのである。それが人間としての格の違いであるかのように感じられ始めるのである。

このように、リスクや格差と自由は、いわば表裏一体の関係にある。満足度の上昇とともに、いったん「悩みや心配」の対象ではなくなっていた人間関係が、再び「悩みや心配」の対象と感じられるようになったのは、おそらくこのような事情によるところが大きいに違いない。それが特に1990年代後半からだったのは、自由と自己責任を強調する米国発祥の新自由主義な考え方が、わが国ではこの時期に社会へ広く浸透していったからである。その結果、今日では、人間関係に否応なく縛られることへの「不満」に起因した「悩み」は大幅に減少したが、それに代わって今度は、不安定な関係による寄る辺なさへの「不安」に起因した「心配」が大幅に増加しているのである。

2. 価値観の多元化の進行

(1) 自己承認欲求の肥大化

ところで、人間関係に強い不安を覚えるようになったのは、人間関係の自由化だけに依るわけではない。そもそも制度的な枠組みの拘束力を弱め、人間関係を流動化させたのは、近代化にともなって進行してきた価値観の多元化という社会状況だった。その結果、現在の日本では、かつてより多様な生き方が積極的に認められるようになり、人生の選択肢も広がってきた。先ほど触れた新自由主義の広がりには、その流れを加速させたにすぎないともいえる。しかし、それは同時に、かつてのように安定した人生の羅針盤が見つかりにくくなったことも意味してい

るのである。

明確な評価の物差しが社会に存在していた時代は、自分の内面に取り込んで自己評価の拠り所とするにせよ、あるいは反発を示して攻撃の対象とするにせよ、いずれにしてもそれを標準器として利用することで、自己確認の基盤を確保することが容易だった。たとえ自分の信念に従って生きているつもりでも、その信念の根拠は自身の単なる思い込みにあっただけではなく、社会的な価値基準との関係で客観性を担保されていたからである。だからこそ、それは時々の自分の気分左右されることなく、つねに一定の方向を指し示す人生の羅針盤となりえたのである¹³⁾。

このように、安定した人生の羅針盤が個人の内に存在していた時代には、人びとはそれを判断の拠り所にするので、たとえ所属する集団の人間関係に強く縛られていたとしても、そこから受ける評価を過剰に気にしなくて済んでいた。自分が進んでいる方向には普遍的な正しさがあると思えたので、たとえ今は周囲の人たちに理解されなくても、いずれは分かってもらえるはずだと期待をかけたのである。

ところが、今日のように価値観が多様化してくると、自分がどんな選択肢を選んだとしても、それを選んだことに安定した根拠を見出せなくなってしまう。別の選択肢の可能性がいつまでも意識のなかに残り、いま自分が選んだものが絶対とは思えなくなる。このとき、人びとは、身近な他者の評価にすがること、自らの選択の客観性を少しでも確保しようとする。自らの判断が妥当であったことの根拠を、そこに求めざるをえなくなるのである¹⁴⁾。

今日では、いつも場の空気を読んで、周囲の人たちの評価を確認しなければ、いま自分が向かっている方向は本当にこれでいいのか確認を得ることが難しくなっている。自分が進むべき方向についての迷いを解消するため、周囲の反応を絶えず探って、それを自分の物差しにせざるをえない。その結果、他者による自己承認の比重が増し、それを得られるかどうか不安の源泉となる。そして、他者から承認を得られない人間には価値がないかのような感覚が広まっていくのである。

(2) 孤立への不安の高まり

1960年代に地方から都会へ出てきた若者に対して行なわれた調査によれば、彼らが抱えていた悩みの第1位は、友人や仲間が見つからないことではなく、独りになれる時間や空間がないことだった。見田宗介(2008:36-7)が指摘したように、当時の若者は、現在の若者のように濃密な人間関係を希求していたのではなく、むしろ逆に、人間関係の濃密さを嫌悪していたのである。だから彼らにとって、独りでも生きていける人間は、たとえば「一匹狼」という言葉に象徴されていたように、まさに憧れの的だった。それは、集団のしがらみからの解放を意味していたからである。

しかし、今日ではその集団の拘束力が弱まった結果、一人でいる人間には価値がないとみなす考え方が、社会に広く浸透している。そんな社会の空気のなかで、人間関係から孤立することに対して、現代の日本人は、とりわけ若年層の人びとは、大きな不安を抱え込むようになってきている。そのため、たまたま一人にならざるをえなくなったとき、しばらく立ち止まってその孤独の味をじっくり噛みしめたり、自分自身を振り返ってみたりするだけの余裕を持ちえなくなっている。その状況をただ否定的にとらえ、その境遇から少しでも早く抜け出そうと躍起にならざるをえなくなっている。

日本人の意識の変化を探るために1970年代から継続して実施されているNHK放送文化研究所（2010）の調査には、「充実した生活を送るために大切なものは何か」を問う設問がある。その結果を見ると、1970年代の若年層では、「なごやかな付き合い」より「経済力」が大切と考える人のほうが多く、全体の6割から7割を占めていた。しかし、2000年代の若年層では、両者の順位が逆転して、「なごやかな付き合い」が大切と考える人が全体の6割から7割を占めるようになってきている。経済万能主義から脱するようになったという点では、たしかに健全な反応といえるかもしれない。しかし、見方を変えれば、豊かな人間関係がなければ幸せな人生を送れないと思ひ込み、その獲得へ向けて日々焦燥感を駆り立てられているともいえる。

たしかに現在の日本では、たとえば30歳を過ぎて独身でも、世間から白い目で見られることは少なくなった。また、コンビニエンス・ストアなどが普及して、単身者でも生活しやすい社会になった。しかし、そうやって人間関係の自由度が高い社会になったからこそ、つねに誰かとつながっていなければ安心できなくなっている。そして、もしそれができないと、自分は価値のない人間だと周囲から見られはしないかと他者の視線に怯え、また自身でも、自分は価値のない人間ではないかと不安に慄くようになってきている。その意味で、じつは今日は、一人で生きていくことがかつて以上に困難な時代なのだといってもよい。

(3) 対人技法としてのキャラ化

いまや独りでいる人間は、かつての「一匹狼」のように格好のよい人間とはみなされなくなっている。むしろ逆に、「一人ぼっち」と蔑まれ、痛い人と侮蔑されるようになってきている。人間関係の自由度は増したのに、その自由な世界で豊かな関係を築けないのは、個人的な能力や資質、魅力に問題があるとみなされがちだからである。たとえば、フェイスブックやミクシィなどのSNSを駆使して絶えずつながりを保持しようとしたり、ツイッターでフォロワーの数を過剰に気かけたりするのも、おそらくそのためだろう。自分には承認を与えてくれる他者がいるだろうか、そして、そんな他者に囲まれた価値ある人間だと周囲から見られているだろうか、いわば二重の意味で他者からの評価を過剰に気にかけているのである⁴⁾。

このように、人間関係を重視する傾向はかつて以上に強まっている。しかし、その一方で、じつはそれを円滑に営むことも、今日ではかつて以上に難しくなっている。なぜなら、先ほど指摘したように、価値意識が多元化するなかで、互いに依って立つ地平がまったく異なるようになってきているからである。2000年を挟んで若者から絶大な人気を博した歌手、浜崎あゆみの歌に、「僕が絶望感じた場所に、君はきれいな花見つけたりする」という詞があるが、このような状況下では、かつてのような「あ・うん」の呼吸など成立しえない。いわばお互いに異文化状況に置かれているようなものである。

このように困難な状況下を、現代の日本人は、とりわけ若い世代は、お互いにキャラを立て、それを演じ合うことで生き抜こうとしている。たとえばハローキティやミッフィーなどを想起すれば分かるように、最小限の線で描かれた単純な造形であるキャラは、私たちに強い印象を与え、全体像の把握も容易である。それは生身の人間の場合も同様であって、あえて人格の多面性を削ぎ落とし、最小限の要素だけで性格を描き出したキャラは、単純明瞭でデフォルメされたものであるが故に、周囲の人びとに自らの存在を強く印象づけてくれる。また、単純なイメージで人格を固定してやれば、お互いの反応が予想しやすくなり、人間関係の見通しもよくなる。

キャラとは、人間関係の先行きが不透明化し、不確実性が増しているなかで、それでも人間関係を破綻させることなく、滑らかに運営していくための対人技法の1つである。また、集団のなかに自分の居場所を確保するための工夫の1つともいえる。それは、人間関係への不安を背景に、お互いに価値観を異にした人間どうしが、それでもコミュニケーションをスムーズに回していくためのシンボル操作なのである。

3. 代替不能性からの疎外

(1) 消えゆく自己の単独性

キャラとは人間関係というジグソーパズルのピースのようなものである。個々のピースの輪郭は単純明瞭であるが、それぞれが異なってもいるため、他のピースとは取り替えがきかない。ピースが1つでも欠けると全体の構図は損なわれてしまうため、集団のなかに独自のピースとして収まっているかぎり、自分の居場所が脅かされることはまずない。キャラは、複雑化した人間関係に安定した枠組みを与えてくれるのである。

しかし、それぞれのピースの形が、全体の構図のなかに収まるようにあらかじめ定められているという点に着目するなら、もし全く同じ輪郭のピースが他のどこかに現われれば、それは自分のピースと置き換えが可能ということでもある。だから現在の若者たちは、そのような状況を「キャラかぶり」と称し、なるべく回避しようと細やかな神経を使う。自分と同じ輪郭のキャラの登場は、集団内で

の自分の居場所を危うくするからである。

逆に、いくら強い個性の持ち主で、どれほど特殊なキャラを示せる存在だとしても、集団内であらかじめ配分されているキャラからはみ出すことは、やはり同様に避けなければならない。全体の構図のなかにうまく収まらないと、自分の居場所を危険にさらすことに違いはないからである。このように、キャラ化された世界においては、それが他ならぬ自分でなければならないという代替不能性が保証されることはない。その点からいえば、キャラとはじつは匿名的なものだともいえる。予定調和を重んじた人間関係の陥穽がここにある。

このところ世間で盛んになった婚活を例に考えてみよう。特定の相手とじっくり向きあって関係を育んでいこうとするのではなく、できるだけ多くの人と出会うチャンスを増やそうと婚活に励むのは、出来合いの錠前に合った鍵を見つけるような感覚で、あらかじめ自分と適合するスペックを備えた相手を見つけようとするようなものである。2人で成長して関係を変えていくという発想はそこに見当たらず、むしろ求められているのは予定調和の関係である。このとき、もしもその活動がうまくいかないとすれば、その理由は条件にあう相手がなかなか見つからないからではなく、そこに単独性を見出しえないからだろう。「条件さえ合致するなら、相手は自分でなくてもよかったのかもしれない」という不安を払拭できないのである。

予定調和の世界とは、確かに見通しもよく、落ち着きのよいものかもしれない。しかし、そこにはあらかじめ想定された枠組みに収まりきらないような、本来の意味での多様性が存在しえない。だから、キャラの輪郭さえ合致するなら、ここに居るのは自分でなくてもよかったのかもしれないという不安が喚起されてくる。コンビニエンス・ストアやファストフードの店員が、店のマニュアルに従って動いてさえいれば、ここに居るのは自分でなくてもよかったかもしれないという疎外感を抱くのと同じことで、自分の単独性がそこでは保証されえないのである。

(2) 伝統的な共同体への憧憬

このように、かけがえのない自分からの疎外感が強まるなかで、その反動として、人格の多元性を縮減させた一面的なキャラに頼った人間関係ではなく、もっと全人格的につながった人間関係に憧憬を募らせる人びとが、このところ増えてきている。自分の代替不能性を確認するために、いわゆる伝統的な共同体への再埋め込みを希求するようになっているのである。

その感性は、2005年に公開され、大ヒットした劇場映画「ALWAYS・三丁目の夕日」にも見てとることができるだろう。観客たちは、あの昭和レトロな画面のなかに、かつての安定した理想的な共同体を見出そうとしていたに違いない。しかし、それはけっして現実の昭和ではない。当時、まだ一般的に見られた生活上のさまざまな困難や、現実の人間関係の鬱陶しさをすべて捨象してしまった上

で、あくまでスクリーンのなかに構築された虚構の世界としての、いわば理想化された昭和時代なのである。

その点では、「ALWAYS」に4年も先立って公開されたアニメ映画、「クレヨンしんちゃん・嵐を呼ぶモーレツ！オトナ帝国の逆襲」のほうが、その荒唐無稽なストーリーに反して、じつははるかにリアルな作品だったといえる。そこには、理想化された昭和時代を求める感性が、スクリーンのなかにストレートに描き込まれていた。「あらゆる思い出と出会える場所」が謳い文句の、「20世紀博」と称する昭和テーマパークへ惹き込まれていったオトナたちの姿は、再埋め込みを渴望する今日の感性を、もの見事に先取りして指し示したものであったのである。

このような感性の高まりは、人びとの価値観が多分化し、人間関係が流動化するなかで、たとえ局面がどのように変わろうとも、けっして揺らがぬ拠り所を確保したい願望が強まっていることの反映といえるだろう。地縁や血縁のように伝統的な共同体は、自分の自由意思で選択したものではないからこそ、相対化の視線をかかわすことができ、自分の安定した拠り所になりうると感じられるのである。

(3) 擬似的な共同体がはらむ陥穽

しかし、伝統的な共同体への再埋め込みを希求する人びとが現実に紡ぐ人間関係は、じつは自己の係留点として役立つかぎりにおいて自由選択された人間関係である。すなわち、そこには伝統的な共同体がリアルに再現されているわけではない。それが仮構としての共同体である以上、現実には自由意思を妨げる外部的な制約が存在していない。その関係に嫌気が差した場合には、いつでも離脱することのできる擬似的な共同体である。それは、柔らかい関係性といってもよい。

かつての伝統的な硬い関係性とは違って、このような柔らかい関係性から成り立つ集団は、真の意味での共同体とはいえない。その関係性の内部にいる他者とは、自己承認にとって脅威とならない限りにおいて、つまり予想外の反応をとらない範囲において、共存が許された他者である。その他者は、あくまで他者らしくふるまわない限りにおいて、その存在を認められている。すなわち、柔らかい関係性は、大澤真幸(2008)の言葉を借りれば、「他者性を抜いた他者」によって構成されているのである。

近年は、たとえば若年層にヒットしたアニメ映画「サマーウォーズ」に描かれているような田舎の旧家の巨大な親族共同体に対して、鬱陶しくて息苦しそうだと忌避感を覚えるのではなく、暖かくて心地良さそうだと羨望のまなざしを向ける若者が増えている。しかし彼らは、それがリアルな共同体ではないことを百も承知である。すなわち、虚構を現実と混同して憧れているのではなく、虚構に真実らしさを与えようような関係に憧れているのである。

したがって、ここには自分に安定感を得えてくれる全人格的に拘束された共同

体を、じつは自らの自由意思で選択しているという逆説的な事態が生じてしまう。その結果、濃密で安定した人間関係を追い求めつづけているのに、いつまで経ってもその到達点が見えてこない焦燥感に駆られることになる。いつでも自由意思で簡単に離脱できる関係性では、じつは安定した拠り所として有効に機能することはありえないのである。

4. つながりの質的変容へ

(1) フラットな人間関係の逆説

柔らかい関係性を構成する「他者らしくない他者」からは、究極の自己承認を得ることができない。自由に選択することができ、したがってそこからの離脱も自由な擬似的な共同体における他者とは、いってみれば自分と対等な存在である。そんなフラットな立場にいる他者から与えられる自己承認など、じつはそれほど有り難いものではない。自由に拒否できる相手からの自己承認など、その程度の重さしかないからである。

他者から与えられた自己承認が絶対的な重さをもつためには、その他者が絶対的な存在として君臨していなければならない。自らの存在など吹き飛ばような圧倒的な力で迫ってくる他者でなければ、自分では回避しようにもできない強制力を持った他者でなければ、そこから受けとる自己承認も絶対的なものとはなりえない。自分の生殺を握るような他者であって初めて、その他者から与えられた自己承認は絶対性と安定性を発揮しうる。自分を傷つけうるだけの強い力を備えた他者だけが、自分が安心して身を任せられる承認を与えてくれる強い存在となりうるのである。

現代人の肥大する自己承認欲求の行方をこのような観点から眺めたとき、大いに参考になる概念がある。それは、かつてT・アドルノらが提唱し、E・フロム（Fromm, 1941）によって応用された権威主義的パーソナリティである。大雑把に言えば、1930年代のドイツにナチス独裁政権が合法的に誕生したのは、自由主義的な憲法下にあったワイマール時代のドイツ中産階級の人びとが、その自由の重荷がもたらす自己の不安に耐えかねて、カリスマとしてのヒトラーに一方的に身を委ねようとしたからだった。そのような心理的傾向を示す人びとの特徴を示した概念が、権威主義的パーソナリティである。

自らの主体性を一方的に放棄してしまえば、自分の人生に自らが責任を背負うこともない。もし事態がうまくいかなくても、その責任はすべて独裁者に押しつけることができる。自らを非難せずに、独裁者を非難すればよいのである。このような時代の空気なかで、自分より上位の権力や威信に対する服従と下位のそれらに対する傲慢という、権威主義的な態度に対して適合的かつ同調的なパーソナリティが人びとの内面に形成されていく。フロム（Fromm, 1941 : chap.1）はこう述べている。「人間が自由となればなるほど、そしてまた彼がますます『個

人』となればなるほど、人間に残された道は、愛や生産的な仕事のなかで外界と結ばれるか、でなければ、自由や個人的自我の統一性を破壊するような絆によって一種の安定感を求めるか、どちらかだということである。」

フロムは、ワイマール時代のドイツ中産階級に権威主義的パーソナリティの典型を見出し、それを母胎にしてヒトラー政権が誕生したと論じた。大勢の人びとの間に広く共通利害が存在し、それを核に社会の強力なリアリティが成立していないと、カリスマ性を有した独裁者は誕生しえない。人びとがどれほど自由の重荷とその不安に喘ぎ、そこからの逃走を願っていたとしても、人びとの欲望のベクトルがほぼ一致していなければ、一人の人間がそれらを一身に引き受けることなどできないからである。その点で、第一次世界大戦後の復興の困難に喘いでいた当時のドイツには、中産階級の人びとに共通の利害が明確に存在し、その意味で社会の強力なリアリティが成立しえていたのである。

(2) カリスマ依存を生み出す心性

ひるがえって日本の現状を眺めてみれば、これまではそのように広く共有される利害関心が成立しえなかったといってよい。先述したように、むしろ日本では価値観の多元化が進行してきたからである。その点で、いまの日本にはカリスマなど成立しえないともいえる。カリスマ的な指導者を待望する声はたしかにあり、時折きな臭い香りも漂ってきたりはするが、候補に挙げられる人物が圧倒的多数の国民から熱狂的な支持を集めるまでには至っていないのが現状である。

しかし今後、人びとのあいだに潜む個々の不安の源泉を的確に汲み取り、それらを共通の利害関心へと仕立て上げることに長けた人物が表われてきたとしたらどうだろうか。民主的選挙によってひとたび権力の座についたヒトラーは、ただちにワイマール憲法を停止し、さまざまな世論操作や政治工作によって自らの基盤を固めていった。いったんヒトラーに身を委ねた人びとは、その後さらに彼に依存しなければ、もはや生きていけなくなった。それと同じことが、現在の日本に起きないと断言することなどできないのではないだろうか。

大勢の民意を獲得して選出された政治家が、その後独裁者へと変貌しうる危険性はどこにでもある。そして、その民意を獲得するために仕組まれる共通の利害関心は、じつは何でもよい。「専門家集団に独占された既得権益を奪え!」、「近隣諸国の脅威から自国の領土を守れ!」など、人びとに広く支持されるトピックを探し出し、それを共通のネタとして人びとの不満や不安を煽っていけばよいのである。

さらに、そのカリスマに対する依存的な態度は、自己組織化されていく傾向も持っている。スーパーヒーローに依存する政治的態度は、それまでの対等性に支えられてきた人間関係を閉じてしまうことにもなるからである。その結果、自己の不安感はさらに高まっていき、ますますカリスマに依存せざるをえないという悪循環が生まれる。圧倒的であるが故に強力な自己承認を与えてくれる他者によ

る指導や助言は、従来の関係性から私たちを引き剥がし、その結果、さらに孤立感を深めた人びとは、ますますカリスマへの依存を深めていかざるをえなくなるのである。

(3) 強固な紐帯から柔軟な紐帯へ

このように眺めてくると、新自由主義が浸透していくなかで無縁化の不安に駆られた人びとが盛んに口にするようになった「絆の大切さ」という耳当たりのよい言葉にも、あるいは東日本大震災後、復興のスローガンのように唱えられるようになった「日本はひとつ」「つながろう日本」などといった言葉にも、じつは光と影の両面があることに気づく。互いにつながって助け合うことは、たしかに素晴らしくて尊いことに違いない。しかし、そうやっていつもつながっていなければならないという強迫観念の下で、一人でいる人間を否定的に捉えがちになり、そのため孤独を味わう余裕を奪い、逆に孤立感を煽っていることにも留意しておく必要がある。

孤立感の高まりは、人びとが共通利害を抱き、それを核に連帯することへの憧憬を高めていく。そして、多種多様な意見の併存から生ずる効率性の悪さを回避するため、フラットな関係よりもヒエラルキカルな関係に対して親和性を強めていく。多種多様な意見の併存から生ずる自己の拠り所なき不安定感も、ヒエラルキカルな関係に埋没し、権威ある他者から与えられる自己承認によって、解消されるかのように錯覚してしまうからである。

そもそも、人びとにつながりを強制し、一致団結を求める態度は、みんなと違うことを悪とみなし、運命の共有を強要し、そこから外れて振るまう人間を断罪しかねない危険をはらんでいる。現実には、人びとの運命の多くは偶然の産物であるし、だからこそ一律には推し量りえない代替不能な喜びや楽しみ、あるいは悲しみや苦しみも存在するはずである。生きることの素晴らしさも、またその困難さも、人によって千差万別のはずである。しかし、つながりを強要する圧力は、その本来の多様性を否定しかねない圧力へと転じる危険を秘めているのである。

社会の流動化が歴史の必然的な趨勢であり、けっして押し留められないものだとしたら、その流れに逆らって往年のような安定した人間関係に囲い込まれて過ごすことなどもはや不可能だろうし、あるいはかつてのように絶対的な固い信念や信条を抱いてそれをアイデンティティの核に生きることにもまた不可能だろう。かつて、クリントン元アメリカ大統領が鋭く指摘したように、過去を追い求めると未来を失うことになるのである。

いま私たちが目指すべきなのは、内部で閉じた強固な結束ではなく、緩やかに外部へ開かれたつながりである。R・パットナム (Putnam, 2000) が指摘するように、人びとの幸福度を大きく規定する社会関係資本には、「結束型」と「橋渡し型」の2つのタイプがありうるが、前者が同質性の高い人びとによる「厚い信頼」から成り立っているのに対して、後者は多種多様な人びとによる「一般的

信頼」から成り立っている⁽⁴⁾。換言すれば、前者が内向きの志向性を備えているのに対して、後者は外向きの志向性を備えている。

人びとの幸福度を増していくために、どちらの社会関係資本も有効な機能を果たしているが、とりわけ「橋渡し型」のそれは、かつてM・グラノヴェッター(Granovetter, 1973)が「弱い紐帯の強み」という逆説的な表現で示したように、流動性が増す現代社会において、大きく変動する環境に適応していくために重要な人的資源となる。「弱い紐帯」は、たしかに結束力については「強い紐帯」に劣っているが、その代わりに高い情報力を持っているため、新たな環境への適応度を増していくのである。

このような観点に立つてみると、いわゆる無縁社会化への対処法も、けっして過去の共同体を復活させることではないことが見えてくるだろう。むしろ人間関係の軸足を外部へと広げ、その数を増やし、現代に見合った形へと絆の質を変容させていかなければならないのである。きな臭いカリスマ待望論の拡大を阻止する道も、おそらくそこにあるに違いない。

〔註〕

- (1) 同様に、1970年代初頭から続けられているNHK放送文化研究所(2010)の「日本人の意識調査」においても、人間関係に満足を感じる若年層は、1970年代以降、大幅に増えている。ちなみに高年齢層では、ほとんど変化が見られない。
- (2) かつてD・リースマン(Riesman, 1961)が「内部志向性」と呼んだ社会的性格の類型がこれに当たる。リースマンは、このタイプの生き方をジャイロスコープの動作原理に例えて説明している。
- (3) かつてD・リースマン(Riesman, 1961)が「他者志向性」と呼んだ社会的性格の類型がこれに当たる。リースマンは、このタイプの生き方をレーダーの動作原理に例えて説明している。しかし現代ならば、おそらくGPSに例えたほうが分かりやすいだろう。
- (4) 浅野智彦(2011:22)は、このような心性を「承認の二重化」と呼んでいる。
- (5) 山岸俊男(1999)は、わが国の集団主義的な「安心社会」が解体されていくにつれ、外部へと開かれた「信頼社会」を構築していくことが必要であると指摘する。しかし、たとえば原発問題に典型的に見られるように、社会の各部門における専門家への一般的信頼が崩れ、むしろその意思決定プロセスを透明化することが要請されるようになってきたことを考えると、価値観の多様化した現代社会では、信頼性の原理よりもむしろ安心性の原理のほうが優先されるべきだという議論もありうる。信頼がいわばブラックボックスを前提として成り立つものであるのに対し、安心はいわばホワイトボックスを前提として成り立つものだからである。民主党の政権時に行なわれた公開での事業仕訳は、まさにその社会の空気を敏感に読み取ったものだったといえるだろう。

〔文献〕

- 浅野智彦 2011『若者の気分 趣味縁からはじまる社会参加』岩波書店
- Fromm, Erich, 1941 *Escape from Freedom*, Farrar & Straus (=1968, 日高六郎訳『自由からの逃走』東京創元社)
- Granovetter, Mark, 1973 "The Strength of Weak Ties", *American Journal of Sociology* 78(6): 1360–1380 (=2006, 大岡栄美訳「弱い紐帯の強さ」野沢慎司(編・監訳)『リーディングス ネットワーク論——家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房)
- 見田宗介 2008『まなざしの地獄』河出書房新社
- NHK放送文化研究所 2010『現代日本人の意識構造(第7版)』NHKブックス
- 大澤真幸 2008『不可能性の時代』岩波新書
- Putnam, Robert, 2000 *Bowling Alone: the Collapse and Revival of American Community*, Simon & Schuster (=2006, 柴内康文訳『孤独なボウリング——米国コミュニティの崩壊と再生——』柏書房)
- Riesman, David, 1961 *The Lonely Crowd*, Yale Univ. Press (=1964, 加藤秀俊訳『孤独な群衆』みすず書房)
- 山岸俊男, 1999『安心社会から信頼社会へ——日本型システムの行方——』中公新書

*本論は、「脱フラット化への渴望——キャラ化した社会のカリスマ待望論——」の前篇(デジタルマガジン『ケサランパサラン』第13号, 2013年2月)と、後篇(デジタルマガジン『ケサランパサラン』第14号, 2013年3月)を統合し、加筆修正を行なったものである。